

複式学級の体育におけるコミュニケーションの特性

村瀬 浩二¹
(¹和歌山大学)

古田 祥子²
(²有田市立田鶴小学校)

清水 将³
(³岩手大学)

Characteristics of communications in P.E. of combined classes

Koji MURASE¹, Shoko FURUTA², Sho SHIMIZU³

(¹Wakayama University)

(²Tazu elementary school)

(³Iwate University)

I. 緒言

現在、少子化の進行に伴い、統廃合や廃校による小学校数の減少、小学校の小規模化が進んでいる。今後、少子化が進むにつれ、へき地だけではなく、地方においてはどのような場所でも学校の小規模校化、複式学級化をせまられるであろう。

小規模校・複式学級はその特殊性から様々なメリット、デメリットをもっている。メリットとして玉井（2015a）は小規模校では子ども同士の信頼関係や互惠関係を形成しやすいと述べている。人数の少ない小規模校・複式学級では子ども同士の信頼関係を築くことで、子どもが互惠関係の中での成長を促しやすいといえよう。一方、デメリットとして、盛島（2015）が「濃い関係だからこそそのコミュニケーション不足」を挙げている。このことについて単式学級の事例で、峠（2011）が身近すぎる関係により、相手の考えを自分なりに解釈し、相手を傷つけないよう配慮している場面があったと述べている。この事例は幼少期から人間関係に変化の生まれにくい、小規模校・複式学級において発生しやすい内容といえる。そのため、意見の多様性が生まれにくいことと、さらには意見の対立を避けてしまうと想定できる。なぜなら、固定的な人間関係が長年にわたって継続し、その関係を保つ必要のある小規模校・複式学級の子どもにとって、意見の対立はその関係を崩す原因となり得るからである。このため、学習指導要領（文部科学省、2017a）の示す対話的な学習を実践することに難しさがあると推察される。

さらに、デメリットについて、高瀬ら（2014）が「同学年での関わりが少なく、学年が上がるほど、同程度のレベルで取り組む仲間が少なくなるため、協働が生まれにくい」と述べている。同様に赤木ら（2017）も「人数が少ないことで、意見に多様性が見られづらいことも少人数であることの問題点である」と述べている。つまり、小規模校・複式学級において、かかわりの狭さが大きな課題の一つであ

り、このかかわりの狭さによって、言語活動の際に考えの偏り、多様な意見の出にくさ、得意な児童や教師への依存といった問題が生じているといえよう。これらの課題は小規模校・複式学級だけのものではない。川前ら（2019）は、できる子だけが発言している状況では、意見に多様性は見られないと述べており、このような状況は単式学級でも同様に起こると予想できる。

一方、異学年集団については、玉井（2015b）が学校内で遊ぶ時には、縦割りで一緒に遊ばざるを得ず、現在でも上級生が下級生に指示して、ルールを柔軟に変更したり、ルール変更を下級生に提案したりするなどの関係性が残っていると述べており、みんなで楽しむためのルール作りやみんなで楽しむ雰囲気は同年代に固定されず、多様な人間関係作りのものになると考えられる。これらの差を埋めようとする様子は、「共生体育」につながるといえる。この共生体育は、共生の視点（文部科学省、2017b）として体育に求められている。この共生の視点は、誰もが参加できる教師の授業づくりに関わる要素に加え、子どもがスポーツ場面において多様な他者を受け入れられる能力でもある。

体育における共生を踏まえた実践として、矢邊・梅澤（2018）のゴール型ゲームの実践では、ルール変更により全員の参加を促し、学習テーマを「メッセージを伝えあう」というオープンエンドなものに変更することで、最終的に得意な児童は受け手にとって受けやすく相手に取られない最適なパスという技能を身に付け、苦手な児童は成功体験により指示を出すなど体育に対して前向きになったと述べられている。これらの実践から、ルール変更やテーマの工夫を行うことですべての児童が夢中になって活動することを目指すことができるといえよう。

では、すべての児童が夢中になって取り組むためにはどのような環境であるべきなのか。西村（1990）は遊び（プレイ）の前提として「できる」と「できない」、「勝つ」と「負ける」の間を楽しむこと、そのために「前提として安心感が大切である」ことをあげている。この西村の考えから、

松田（2008）は運動あそびの前提として嘲笑されたり、罵られたりすることのない安心できる場の必要性をあげ、体育授業においてもこの「安心感」が存在しなければならないと述べている。この安心感は周囲の評価を気にせず、夢中になって取り組める環境を生み出しており、体育においては技能のレベルや勝敗などを気にせず、すべての子どもが参加できるための基礎となる部分であるといえる。

そこで本研究は、教師へのインタビューから小規模校・複式学級における体育授業の特性を、明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

小規模校に勤務する教師、複式学級を担任する教師11名（表1）を対象に、半構造化面接法を用いてインタビュー調査を実施し、そのインタビューデータを録画または録音した。なお、対象となった教員はすべて小学校教員である。

インタビューは対面、Zoomまたは電話を用いて50～60分実施した。

表1. インタビュー対象者の属性ならびに実施日一覧

対象	教員歴	複式学級担当年数	インタビュー実施日
N	28年	2年	2020年10月5日
S	27年	9年	2020年10月8日
H	17年	7年	2020年9月29日
Y	16年	3年	2020年6月23日
A	15年	10年	2020年10月7日
T・N	11年	7年	2020年10月8日
H・K	6年	1年	2020年9月17日
T・T*	2年	0年	2020年10月26日
K	27年	5年	2020年7月21日
M	4年	1年	2020年11月13日
O	8年	2年	2020年11月6日

* 1学年20人未満の小規模校勤務

2. 分析方法

インタビューを録音または録画した音声をもとにテキストデータを作成した。作成したテキストデータを質問項目別に、12のコードに分類した（表2）。分類したデータは

表2. 半構造化面接における質問項目と分類コード

番号	質問項目	コード
1	小規模校・複式学級の特性をメリット・デメリットに分けて教えてください。	{ 複式のメリット 複式のデメリット
2		
3	学校としてコミュニケーションに対して取り組まれていることがあれば教えてください。	学校でのコミュニケーションへの取り組み
4	先生の感じる子どもの特性について教えてください。	子どもの特性
5	体育の授業や普段の学校生活での発言や発言機会について教えてください。	意見発言の偏り
6	子どもの体育の授業時の様子を教えてください。	} 体育授業での様子
7	体育の授業時の子どものコミュニケーションについて教えてください。	
8	先生が体育の授業で工夫されていることがあれば教えてください。	教師の体育の取り組み
9	体育の授業時や普段の生活での役割の割り振りについて教えてください。	役割の偏り
10	人間関係の固定化に関して感じることを教えてください。	固定化
11	先生が体育の授業時、コミュニケーションについて取り組まれていることを教えてください。	体育授業でのコミュニケーション
12	先生が普段の学校生活でコミュニケーションについて取り組まれていること等あれば教えてください。	教師のコミュニケーションへの取り組み
13	単式学級や大規模校と比較して感じることを教えてください。	単式のメリット

質的データ分析ソフト NVivo12 pro のクラスター分析を用いて分析を行った。

Ⅲ. 結果及び考察

11名の小規模校に勤務している教師または複式学級を担任している教師に対し実施したインタビューからテキストデータを作成した。作成したテキストデータをもとに NVivo12 Pro 日本語版を用いてコード別にクラスター分析を実施し、コード間で関係を明らかにした(図1)。その結果、①小規模校・複式学級の特性と学校の取り組み、②子ども

の特性・意見発言の偏り、③体育の授業時の子どもの様子・教師の取り組み、④役割の偏り・固定化・コミュニケーションの4つのクラスターが抽出された。これら4つのクラスター別に、さらにテキストデータを対象としたクラスター分析を実施し、得られた結果からストーリーライン(戈木, 2010)の作成方法を用い、典型的な文例を作成した。ストーリーラインは質的データをコード化し、さらにより多くのインタビュー結果を組み合わせることで抽象度を上げ、一般化することを目的に作成されるものである。

なお、結果の図における丸数字の番号と、以下に示す文例の丸数字の番号は対応している。

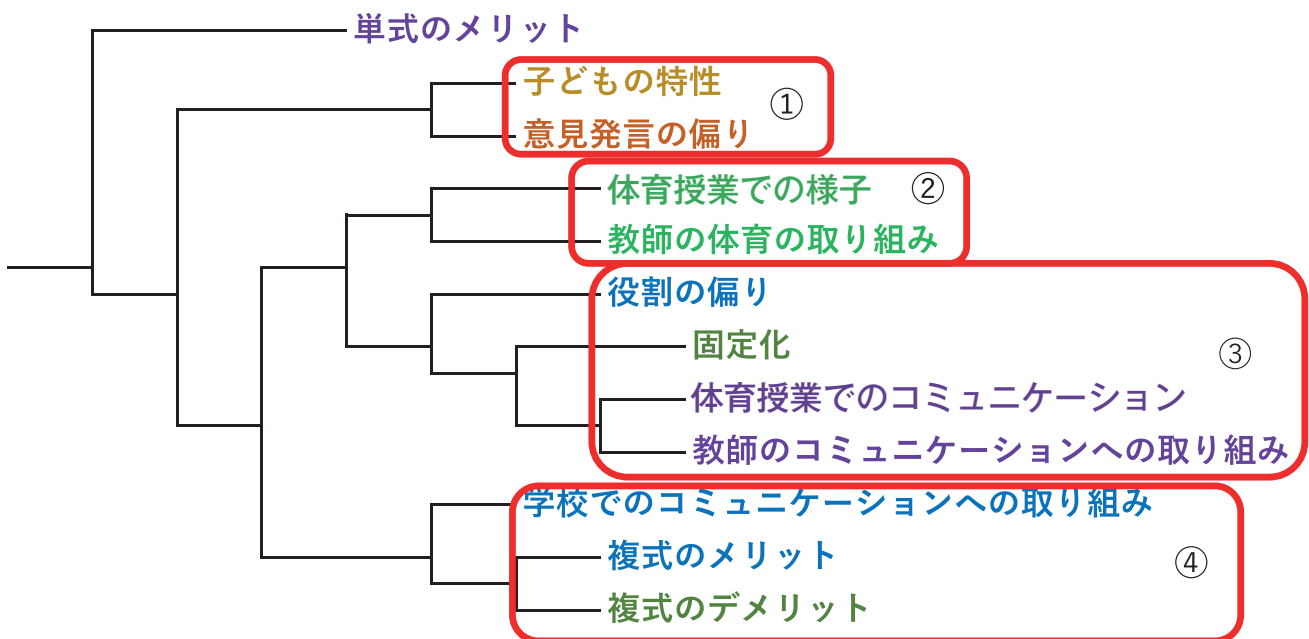


図1. 質問項目コードのクラスター分析結果

1. 小規模校・複式学級の特性と学校の取り組み

1-1. 結果

小規模校・複式学級におけるインタビュー結果クラスター分析により作成された図をもとに、5つの文例を作成した(図2)。

〈文例〉

- ①人数が少ないのでみんなで考えないといけない。
- ②複式の場合、ずっと人数は少ないままだが、組み合わせの変化があるのでゲームなどの経験の有無から教えるー教えられるの関係が変わる。
- ③小規模なので、縦割りグループを取り入れ、上級生が下級生のお手本になったり、異学年でのコミュニケーションの機会を設けたりしている。
- ④チームスポーツができず、チームを分けたとしても結局メンバーが同じで、変化がない。
- ⑤人数が少なく、いろんな子とのかかわりはないが、難しい特性の子でもクラスに変化がないため、うまく対応している。

1-2. 考察

〈小規模校・複式学級の特性と学校の取り組み〉

小規模校・複式学級では、人数の少なさによるかかわりの狭さを複数の教師があげていた。このかかわりの狭さは、デメリットとして社会性を育みづらいといった特性を生み出している。これは、幼少期からの固定的な関係によるコミュニケーション不足(盛島, 2015)に起因しており、身近すぎる関係により、相手の考えを自分なりに解釈し、相手に配慮するため(峠, 2011)にコミュニケーションを控えることから起きるものである。しかし、このことは一方で、メリットである個性の強い子どもの受け入れや自己解放のしやすさといった特性を生み出している。さらに、人数の少なさによって、全員で考える必然性について教師が述べていた。これは、人数の少なさにより全員で経験を共にすることで、クラス全員が同じレベルとなり、できる子一人で進めるといった状況が生まれづらいためと考えられる。これについては、川前(2019)の示した小規模校での課題「できる子だけが発言する状況」とは食い違っているが、教師の学級経営により改善された成果と捉えることができよう。

また、学校の取り組みとして多くの学校で縦割り活動が

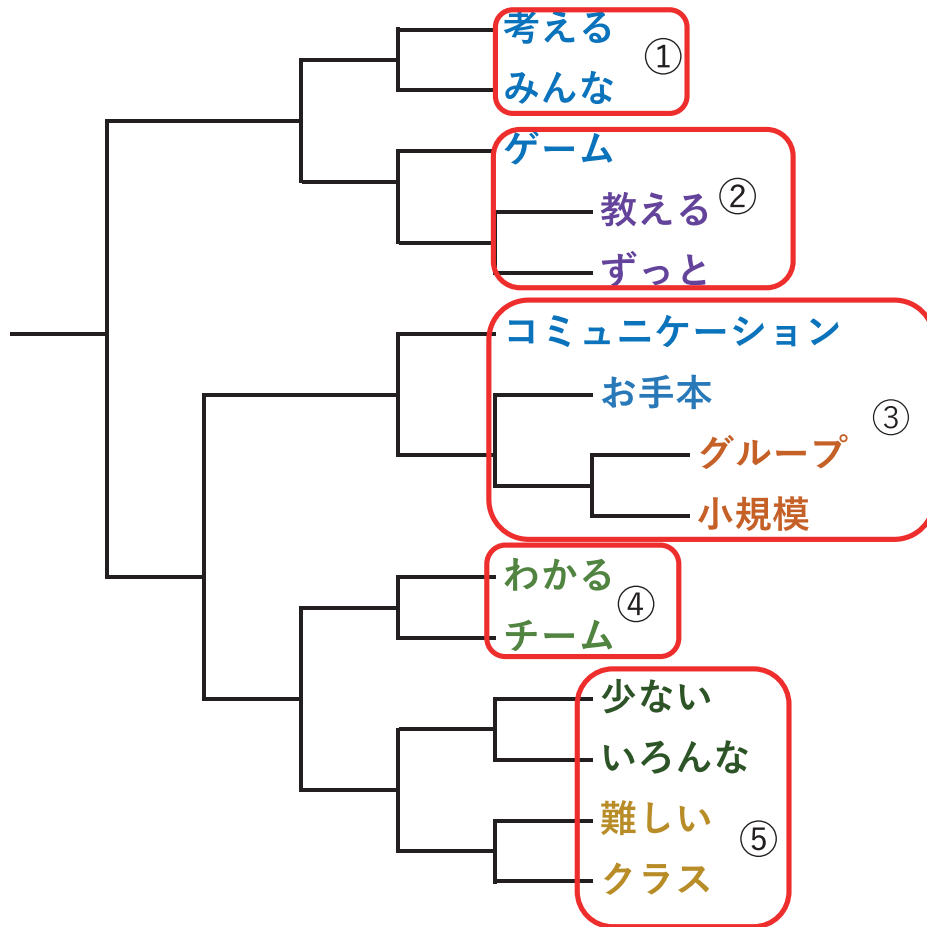


図2. 小規模校・複式学級の特性と学校の取り組みに関するクラスター分析結果

行われていた。この活動により、異学年でのコミュニケーションの機会が確保されており、上級生はリーダーシップや下級生への伝え方を育てているといえる。下級生についても、上級生とかかわることで、学びの見通しや高学年になった際の取り組みを学ぶことができる。体育の授業においても同様に、前年度の活動を活かした内容にすることで、前年度の学びを上学年が下学年に教えることで組み合わせの変化による、教える－教えられるの両方の立場の経験ができる。さらに、縦割り活動や全校での活動では、個々の能力や年齢差による違いの包括といった様々な学びが生まれている。これら縦割りでの活動は、学校としての取り組みのなかに積極的に取り入れられるものであり、そこでの互惠関係（玉井2015a）が小規模校の様々な特性を生み出していると推察できる。

2. 体育時の子どもの様子と教師の取り組み

2-1. 結果

クラスター分析により作成された図をもとに5つの文例を作成した（図3）。

〈文例〉

- ① 考えてもわからない子はうまい子のマネをし、うまい子は教えることで、動きがわかる。
- ② ルールを変えたり、自分たちでハンデを決めたりすることで、勝敗にこだわらなくなる。
- ③ 人数が少ないのでチームスポーツが難しい。
- ④ 人数が少ないからできないではなく、工夫したらいろんなゲームができることに気づかせる。
- ⑤ みんなわからない子に対して優しく教えている。一方で、教えるだけだとつまらないので、教師はみんなで動けるようルールを工夫をしたり子どもたちとルールを考えたりする時間を確保している。

2-2. 考察

〈体育時の子どもの様子と教師の取り組み〉

体育授業時における子どもの特性として、子どもたち自身がルールを工夫することと勝敗へのこだわりの無さが挙げられる。これは人数の少なさに起因していると推察できる。人数の少なさのため、特に学年の上昇に伴い同レベルで取り組む仲間が少なくなる（高瀬，2014）ことによる技能の

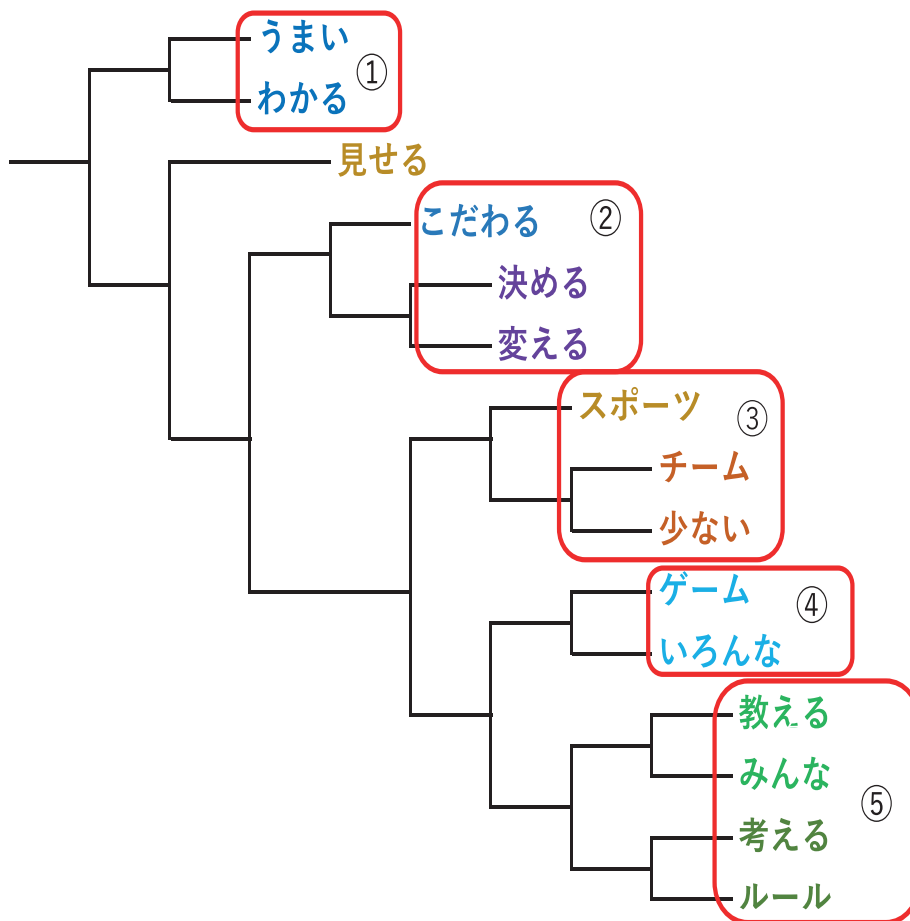


図3. 体育時の子どもの様子と教師の取り組みに関するクラスター分析結果

序列化, それに伴うマンネリ化の中で子どもたち自身が楽しみを見出そうとしていると推察できる。そこで, 自分たちに合ったルール, ハンデを考へて取り組むことで, 得意な子は苦手な子にとっての難しさを, 苦手な子はできる子と自分の違いを学ぶことができるといえよう。このハンデの導入による全員参加は, 梅澤 (2020) が全員にとって画一的でないルールを作ることで「吹きこぼれ (落ちこぼれの逆)」を防ぐと述べていることから, 得意な生徒にとっても有益な取り組みとなっていると捉えられる。また, 極小規模校やいびつな複式学級では教師のゲーム参加なども行っているが, 技能差, 体格差のある教師の参加に対し子どもは「ずるい」といった感情を抱かないことから, ゲームができる楽しさ, 面白さに着目しており, 勝ち負けやレベル差を意識していないと解釈できる。つまり, 単式学級と異なり複式学級では常に年齢差のある中での活動となるため, 異年齢, 異能力での活動が当たり前となっている。この異年齢, 異能力での活動は多様性の中での活動の一つであるといえる。これは能力差や年齢差が広がる極小規模校になるほど顕著となると推察できる。

また教師の取り組みとして, 多くの教師がルールの変更やハンデの導入などを行っていると述べていた。特に, ルールの変更では, 子どもとルールを作っていくと答える教師が多かった。これは, 人数が少なく, 一人ひとりの意見を取り入れやすいためにできることといえよう。ルールを自

分たちで考へ, 工夫することでよりゲームを理解し, 全員の意味ある参加を考へるきっかけとなっていると捉えられる。このような取り組みが, 子どもたち自身によるルール調整を促進し, さらには遊びのなかの関係 (玉井, 2015b) にも反映されている。

これらは, 教師にとって教材づくりの工夫を求められることとなるが, 子どもにとっては誰とでもスポーツを楽しむという生涯スポーツへのきっかけとなる。また, 梅澤 (2020) はインクルーシブ体育について, 技能や年齢, 障がいなど様々な差を包括することで互恵性のある学びを生み出すとしており, 小規模校・複式学級の体育においても同様の学びが生み出されていると捉えられる。

3. 子どもの特性・意見発言の偏り

3-1. 結果

クラスター分析により作成された図をもとに文例を作成した (図4)。

〈文例〉

- ①同学年はもちろん, 異学年でもそれぞれのことをわかっており, 上下関係なくみんなで楽しそうに活動しており, なんでも言い合える。
- ②少ない人数なので, みんなが考へないといけない。

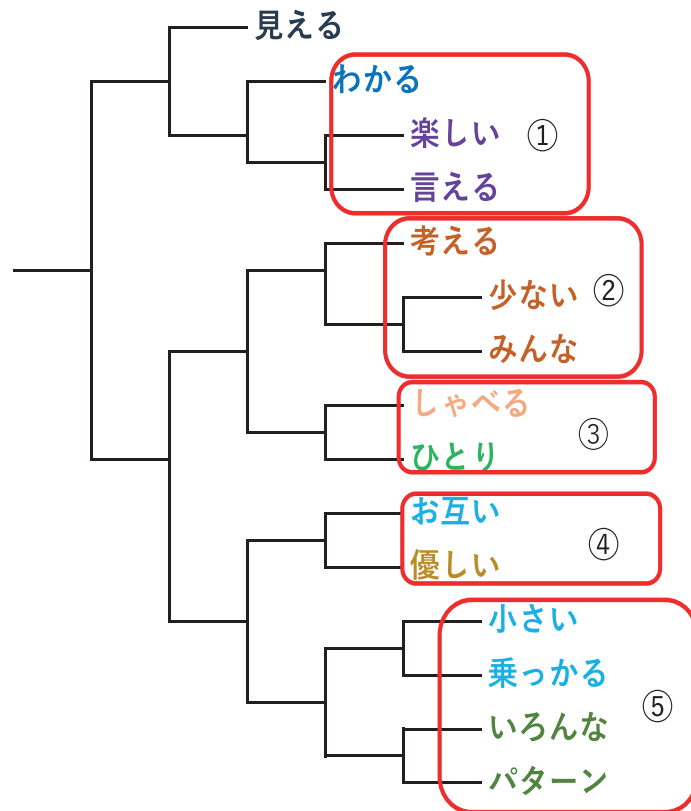


図4. 子どもの特性・意見発言の偏りに関するクラスター分析結果

- ③人数が少ないので、一人ひとりが考える時間、しゃべる時間を確保する。
- ④お互いを理解していて、だれに対しても優しい子が多い。
- ⑤小さい集団で周りの意見に乗っかる傾向があるので、教師がいるんなパターンの意見を持っておくようにしている。

3-2. 考察

〈子どもの特性・意見発言の偏り〉

小規模校・複式学級の子どもの特性として、優しさを多くの教師が挙げていた。この優しさとは、相手の嫌な部分の受け入れや上級生の下級生への寛容さ、友達を放っておけないなどの子どもの様子である。これは、お互いを理解しており、相手に対し寛容になっているために起きると推察できる。特に上級生は下級生とのかかわりの中で自分と能力の異なる子どもへの接し方を学ぶ過程で優しさが育まれるといえよう。また、下級生の勝手な行動に対して上級生は何も言わずに優しく教えるという教師の発言から、この優しさは、もめごとの発生を抑制すると推察できる。

また経験を共にしているため、お互いのことをよく理解しているといった特性を確認できた。この互いの理解については、発言の苦手な児童が話す際、他の児童はどれだけ時間がかかってもその子の話すのを待つ、という教師の発言からも推察できる。このようにお互いをよく理解してい

ることから、子どもにとって安心感（松田，2008）を持つ環境と捉えられる。

一方、習い事などに行く機会が少なく、全員の経験にほとんど差がないため、話の広がりや深まりを生みづらいことがあげられていた。さらに、子どもは本来思っていることと違って多数派の意見に乗ると多くの教師は述べていた。これは、意見の多様性が見られない（赤木，2017）とする指摘に合致し、小さなコミュニティの中で上手く生きていくための方法として子どもが身に付けた特性と推察できる。このような意見の偏りに対し、教師は複数の異なる案を準備し、子どもに迷いが生じるように仕向けるなどの取り組みを行っていた。この教師の取り組みは、子どもの考えを広げるきっかけといえる。さらにこれを促進するために、教師は一人ひとりの発言機会を確保しており、全員が考えを出すことによる考えの広がりやコミュニケーションの場を作り出している。

4. 役割・固定化・コミュニケーションへの取り組み

4-1. 結果

クラスター分析により作成された図をもとに文例を作成した（図5）。

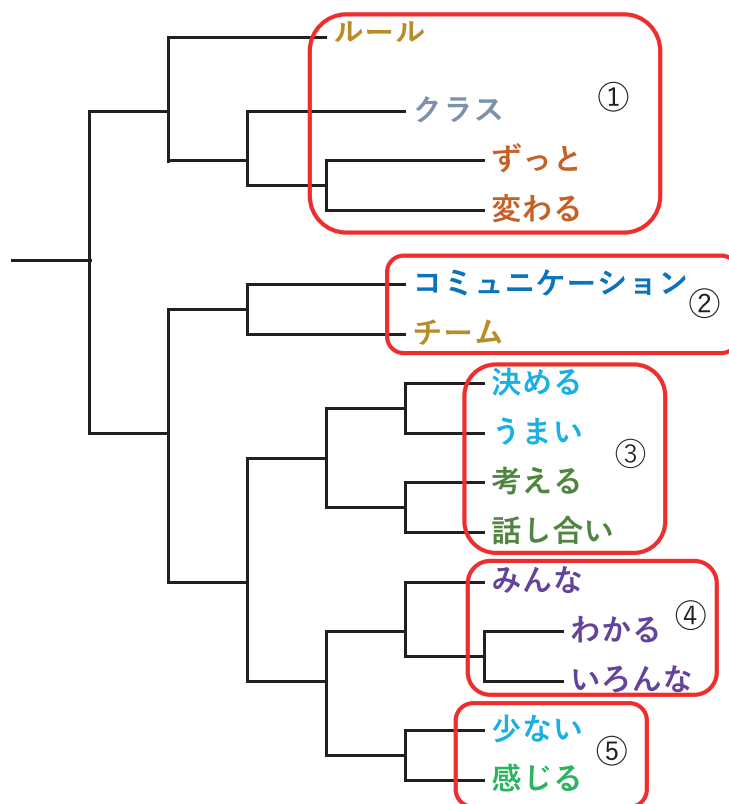


図5. 役割・固定化・コミュニケーションに関するクラスター分析結果

〈文例〉

- ①ずっとメンバーが変わらないので、クラス内での暗黙のルールができてしまっている。
- ②チーム内でのコミュニケーション機会を確保するだけでなく、チーム間で共有する時間を確保することで、考えを広げられるよう取り組んでいる。
- ③話し合いの場面などでは、うまい子の言うことだけで決めるのではなく、みんなで考えながら進めている。
- ④いろんな経験を共にしているので、みんなお互いのことをわかったうえでその子に応じた役割分担をしている。
- ⑤人数が少なく、子ども間での技能や特性を理解し合っているように感じる。

4-2. 考察

〈役割・固定化・コミュニケーションへの取り組み〉

役割や固定化については、子どもが互いを理解していることにより、クラス内で決まった役割に固定化されており、役割の変化が起きづらいことを特性としてあげることができる。これは、固定的な人間関係により、クラスでそれぞれの子にあった役割を決めつけているためと言える。そのため、クラス内に暗黙のルールが存在することになりやすい。峠（2011）が述べた互いへの無言の配慮が、この役割の固定化や暗黙のルールを生み出していると推察できる。このような役割の固定化による偏りに対し、教師は同じ役割を2回やらない、苦手な子をリーダーにするといったルールを決めることで多くの子に様々な経験の機会を与えようとしていた。しかし、さらに小規模校において子どもの人数が1人や2人の場合、全員が必ず何らかの役割を担うまたは全員で取り組むため、役割の偏りが発生しない。

このようなコミュニケーション不足になりやすい特性に対して、教師はコミュニケーション面の工夫としてグループでの話を全体で展開するといった活動や、得意な子同士、苦手な子同士のペアでの話し合いを取り入れていた。これらは、決まったメンバーの中でもできるだけ意見を広げるための工夫であり、子どもに教える、教えられる以外の関係を作るきっかけとなっていると推察できる。また、得意な子だけでなく、全員が考えるために、教師は一人ひとりの話す機会を確保していた。これにより、得意な子だけでなく、全員で取り組もうとすると推察できる。さらに、教師の取り組みとしてポイントを絞ったりヒントを与えたりしていた。これは、教師が焦点を絞ることで経験の乏しい児童らでも考えやすく発言しやすい場を作っていると推察できる。このようなコミュニケーション不足に対する取り組みとして「メッセージを伝え合う」といったオープンエンドなテーマが有効と報告されている（矢邊・梅澤, 2018）。このような手立てにより新たなメッセージを伝えることで、相手に理解されている、相手のことを理解しているという認識を揺さぶることが有効と考えられる。

5. 総合考察

- 小規模校・複式学級において、以下の特性が確認された。
- ・人数の少なさによる関わりの狭さ
 - ・社会性の育みづらさ
 - ・個性の強い子どもの受け入れや自己解放のしやすさ
 - ・相手の嫌な部分の受け入れなどといった優しさ、寛容さによる安心感のある居場所
 - ・相互理解の深さ
 - ・経験の差の少なさ、多様性の不足
 - ・役割の固定化

これらは、学校生活全般における特性であるが体育授業のなかでも確認されるものである。さらに、体育授業における特性として以下の要素を挙げることができる。

- ・子どもによるルールの工夫
- ・勝敗へのこだわりの低さ

これらの特性は人間関係の狭さに起因しており、それが様々な特性を生み出していることが示唆された。また、この人間関係の狭さは、子ども間の理解の深さを生み出しており、互いを認め合いやすく、一人ひとりの居場所を作りやすいといえる。特に、個性の強い児童の受け入れや支援の必要な子の受け入れを当然としており、小規模校・複式学級の子どもたちは個に応じた対応を自然と身に付けていると推察できる。この受け入れは、異学年における体育の場面での能力差や体格差などの差に対しても生じており、体育において自身ができないことへの不満や勝敗に対するこだわりよりむしろ、みんなで楽しむ、みんなの参加に価値をおいていると考えられる。また、ルールの修正はこのように多様性の受け入れのために加え、マンネリ化を避け、変化を生み出す試みとも捉えることができよう。つまり、小規模校・複式学級の子どもたちは体育場面において、限られた人的資源の環境のなかで、自分たちで楽しみ方を生み出そうとする能力を持つと捉えることができる。

この差を包括し、全員の意味ある参加を求める能力は、学習指導要領解説体育編（文部科学省, 2017b）に掲げられた共生体育の考え方に合致する。また体育科の目標である生涯スポーツの実践者の育成から見ても、このみんなで楽しむ、参加を重視できることは重要な能力として捉えることができる。なぜなら、生涯スポーツでは学校体育よりさらに様々な差の包括を必要とする場面が多く存在する。それは例えば、年齢、性別、障がいの有無、人種等である。これら多くの差が混在する状況で全員の楽しさや参加を優先する能力は、その生涯スポーツ場面を運営できる実践者の育成につながっていることを示している。

一方、この人間関係の狭さは、争いごとやもめごとの少なさの原因ともなっている。人間関係の変化のなさから、子どもは狭いコミュニティ内で関係を崩さないことを重視する。これは、子どもたちが自身の意見を表現せず、多数派の意見に流されることや、争いごと、もめごとの少なさから読み取ることができる。これらの根本には相互理解

の深さが存在しており、相手の考えを自分なりに解釈し、先読みをした対応をすることで回避していると推察できる。しかし、このことは対話的な学習（文部科学省，2017a）を阻害する要因となる。対話は意見の対立から起きるものであり、相手の考えを察し、それを消極的に受け入れようとする状況には生まれない。特に体育場面において、対話は「もめごと」として現れる。井沼・村瀬（2019）によれば、特にボール運動のような集団種目においては、この児童間のもめごとの解決過程において技能や思考力・判断力の学習がなされる。しかし、小規模校・複式学級においてはこのようなもめごとを避ける傾向にあるため、集団種目における学習に課題があることが示唆された。これは、学習指導要領でも重視された表現力の育成においても不利に働く材料となり、将来的なSociety 5.0において求められる能力の育成という観点から課題となる点である。

これらのことから、小規模校・複式学級の特性である人間関係の狭さは、安心感を生み出し、生涯スポーツ実践者の育成につながっていることが示唆された。一方で、コミュニケーション不足や社会性のなさといった課題が改めて確認できた。この課題に対し、多くの教師が発言機会の確保や複数回答の準備などコミュニケーション不足への対応に取り組んでいた。今後の課題として、オープンエンドな発問やICTを用いた他校との交流など、社会性を育む取り組みが必要であろう。

付記

付記：本研究は、科研費基盤（B）課題番号18H01003の助成を受けた。

IV. 引用参考文献

- 赤木和重・安藤友里・山本真帆・小淵隆司・戸田竜也（2017）複式学級における教育可能性の再発見—授業づくり・インクルーシブ教育・自尊感情の視点から—，へき地教育研究（72），29-38.
- 井沼瑶・村瀬浩二（2019）ゴール型ゲームにおける子どもの学び：児童の対話と教師の働きかけからの検証。和歌山大学教育学部紀要教育科学（69），91-95.
- 川前あゆみ・玉井康之・二宮信一（2019）豊かな心を育むへき地・小規模校教育少子化時代の学校の可能性，学事出版。
- 松田恵示（2008）運動あそびの社会心理学，体育の科学58（5），杏林書院，pp326-330.
- 文部科学省（2017a）小学校学習指導要領
- 文部科学省（2017b）小学校学習指導要領解説体育編
- 盛島寛（2015）体育における小規模校の弱みを強みに変えるために，体育科教育（63）2，大修館書店，pp14-17.
- 西村清和（1990）遊びの現象学，勁草書房。
- 高瀬淳也・森田憲輝・中島寿宏（2014）へき地小規模小学校におけるベースボール型授業の事例研究。北海道体育学研究（49），13-19.

玉井康之（2015a）全国的小規模校化の中でのへき地小規模校教育の積極面と汎用的活用の可能性，へき地教育研究紀要（70），1-8.

玉井康之（2015b）“教育の原点”としての小規模校の特性とチーム力の活かし方，体育科教育（63）2，大修館書店，pp10-13.

峠修一（2011）話し合い活動を通して仲間とのかかわり方や取り組み方を見直していった子どもたちに学ぶ—第2学年体育科「なかまとあそぶ—てつぼう—」の実践から，体育科教育（59）11，大修館書店，pp40-43.

戈木クレイグヒル滋子（2010）グラウンデッド・セオリー・アプローチ実践ワークブック，日本看護協会出版界。

矢邊洋和・梅澤秋久（2018）「運動格差」を包括するボール運動の実践—アダプテーション・ゲームの活用—，体育科教育（68）11，大修館書店，pp70-72.

